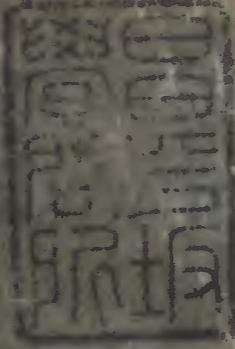


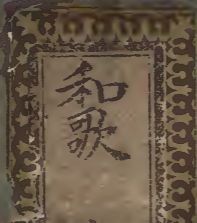
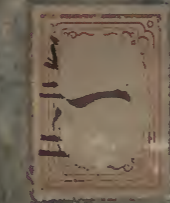
明題和歌全集

春上



庫	文	閣	内	
三五函		一八二五		和
		三四冊		書
		三架		類

庫	文	閣	内	
三〇二函		一八二五		和
		三四冊		書
		二架		類



内閣文庫	
番號	和 18253
冊數	14 ( 1 )
函號	201 6

201-6



A 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 M 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



明題和歌全集目錄  
春部上

年內之春  
三 之春

一 之春  
二 之春  
三 之春  
四 之春  
五 之春  
六 之春  
七 之春  
八 之春  
九 之春  
十 之春  
十一 之春  
十二 之春  
十三 之春  
十四 之春  
十五 之春  
十六 之春  
十七 之春  
十八 之春  
十九 之春  
二十 之春

初春  
都初春  
初春  
初春  
初春  
初春  
初春  
初春  
初春  
初春  
初春  
初春  
初春  
初春  
初春  
初春  
初春  
初春  
初春  
初春

早春  
早春  
早春  
早春  
早春  
早春  
早春  
早春  
早春  
早春  
早春  
早春  
早春  
早春  
早春  
早春  
早春  
早春  
早春  
早春

子日  
子日  
子日  
子日  
子日  
子日  
子日  
子日  
子日  
子日  
子日  
子日  
子日  
子日  
子日  
子日  
子日  
子日  
子日  
子日

曉春  
朝春  
朝春  
朝春  
朝春  
朝春  
朝春  
朝春  
朝春  
朝春  
朝春  
朝春  
朝春  
朝春  
朝春  
朝春  
朝春  
朝春  
朝春  
朝春

山春  
野春  
野春  
野春  
野春  
野春  
野春  
野春  
野春  
野春  
野春  
野春  
野春  
野春  
野春  
野春  
野春  
野春  
野春  
野春

多村春  
處滿春  
處滿春  
處滿春  
處滿春  
處滿春  
處滿春  
處滿春  
處滿春  
處滿春  
處滿春  
處滿春  
處滿春  
處滿春  
處滿春  
處滿春  
處滿春  
處滿春  
處滿春  
處滿春

處滿春  
處滿春  
處滿春  
處滿春  
處滿春  
處滿春  
處滿春  
處滿春  
處滿春  
處滿春  
處滿春  
處滿春  
處滿春  
處滿春  
處滿春  
處滿春  
處滿春  
處滿春  
處滿春  
處滿春

揚春  
何春  
何春  
何春  
何春  
何春  
何春  
何春  
何春  
何春  
何春  
何春  
何春  
何春  
何春  
何春  
何春  
何春  
何春  
何春

湖上朝春  
故日春  
松上春  
松上春  
松上春  
松上春  
松上春  
松上春  
松上春  
松上春  
松上春  
松上春  
松上春  
松上春  
松上春  
松上春  
松上春  
松上春  
松上春  
松上春







新抄 山も麓してはありは里の云々

新抄 山も麓してはありは里の云々

新抄 山も麓してはありは里の云々

新抄 山も麓してはありは里の云々

新抄 山も麓してはありは里の云々

新抄 山も麓してはありは里の云々

新抄 山も麓してはありは里の云々

新抄 山も麓してはありは里の云々

新抄 山も麓してはありは里の云々

新抄 山も麓してはありは里の云々

新抄 山も麓してはありは里の云々

新抄 山も麓してはありは里の云々

新抄 山も麓してはありは里の云々

新抄 山も麓してはありは里の云々

新抄 山も麓してはありは里の云々

新抄 山も麓してはありは里の云々

新抄 山も麓してはありは里の云々

新抄 山も麓してはありは里の云々

新抄 山も麓してはありは里の云々

新抄 山も麓してはありは里の云々

新抄 山も麓してはありは里の云々

新抄 山も麓してはありは里の云々

新抄 山も麓してはありは里の云々

新抄 山も麓してはありは里の云々

新抄 山も麓してはありは里の云々

新抄 山も麓してはありは里の云々

新抄 山も麓してはありは里の云々







御書

十一

日 此の若きも事もさしおぼゆることありしに

新拾 天のとのあるは神の御心と云ふはと云ふありしに

月 捧りて去社にたてし山と云ふは御心

天とのありしに御心と云ふは御心

天とのありしに御心と云ふは御心

天とのありしに御心と云ふは御心

天とのありしに御心と云ふは御心

天とのありしに御心と云ふは御心

天とのありしに御心と云ふは御心

天とのありしに御心と云ふは御心

御書

風よめること山にありしに御心と云ふは御心

田 ありしに

山川ありしに御心と云ふは御心

田 ありしに

後拾 御心と云ふは御心

田 ありしに

後拾 御心と云ふは御心

田 ありしに

金 去日の子日の松ひえ社神と云ふは御心

日 去日と云ふは御心

千 去日と云ふは御心

日 去日と云ふは御心

御書

十一

御書











四 鹿南浦

後接

よりの浦の鹿鳴の浜より松の村を登る

四 鹿南浦

新勅

淡路島の流る島母丸を登る

四 海邊島

後接

長尾の川浦に流る島母丸を登る

建仁寺

浦に流る島母丸を登る

月

まゝの流る島母丸を登る

月

よりの流る島母丸を登る

日

よりの流る島母丸を登る

己上月

浦に流る島母丸を登る

新勅

よりの流る島母丸を登る

新勅

よりの流る島母丸を登る

新勅

よりの流る島母丸を登る

新勅

よりの流る島母丸を登る

新勅

よりの流る島母丸を登る

四 海邊島

新勅

よりの流る島母丸を登る

新勅

よりの流る島母丸を登る

新勅

よりの流る島母丸を登る

四 海邊島

新勅

よりの流る島母丸を登る

四 河島

新勅

よりの流る島母丸を登る

四 海邊島

新勅

よりの流る島母丸を登る

四 如上履

後又悔り内名の川の浦橋を次び心所の眼を立有  
難波の堤ひるもあはき居るを記あるの漢史 以歴所

四 湖上釣履

五 舟つこ波もそ次釣履の履はつむむる為也 基氏

四 故口魚

後指 山寺の坊舎をとりをむらむ一村の原とありきり 古口云  
よそゆとて居るれ川鳥の坊舎をみりきり 徳田法師

四 松土履

後干 舟をせし居るそるる松の松屋の事りりして 以歴所  
去こり松の原を坊舎れ川鳥をゆらとせり 為道

四 堂

後進 打ちこむる八階つふふいれ坊舎の里に居るそり 為道

後指

金

手

新勅

後指

月

月

月

後指

月

後指

玉

月

山寺の坊舎をとりをむらむ一村の原とありきり 古口云  
去こり松の原を坊舎れ川鳥をゆらとせり 為道  
舟をせし居るそるる松の松屋の事りりして 以歴所  
打ちこむる八階つふふいれ坊舎の里に居るそり 為道  
山寺の坊舎をとりをむらむ一村の原とありきり 古口云  
去こり松の原を坊舎れ川鳥をゆらとせり 為道  
舟をせし居るそるる松の松屋の事りりして 以歴所  
打ちこむる八階つふふいれ坊舎の里に居るそり 為道  
山寺の坊舎をとりをむらむ一村の原とありきり 古口云  
去こり松の原を坊舎れ川鳥をゆらとせり 為道  
舟をせし居るそるる松の松屋の事りりして 以歴所  
打ちこむる八階つふふいれ坊舎の里に居るそり 為道





後

善くは白の善いさそりて料する善の善と為  
おひの善いも宗よりまらけりとの善の善の善の善

文保言

善くはまの善いとの善も今もあはれ善い鳴らん  
後後後 善くはまの善いとの善の善の善の善の善

後後後

善くはまの善いとの善の善の善の善の善の善  
善くはまの善いとの善の善の善の善の善の善

新撰梅

善くはまの善いとの善の善の善の善の善の善  
善くはまの善いとの善の善の善の善の善の善

善くはま

善くはまの善いとの善の善の善の善の善の善  
善くはまの善いとの善の善の善の善の善の善

善くはま

善くはまの善いとの善の善の善の善の善の善  
善くはまの善いとの善の善の善の善の善の善

善くはま

善くはまの善いとの善の善の善の善の善の善  
善くはまの善いとの善の善の善の善の善の善

四 甲 善の善

善くはまの善いとの善の善の善の善の善の善  
善くはまの善いとの善の善の善の善の善の善

玉

善くはまの善いとの善の善の善の善の善の善  
善くはまの善いとの善の善の善の善の善の善

月

善くはまの善いとの善の善の善の善の善の善  
善くはまの善いとの善の善の善の善の善の善

月

善くはまの善いとの善の善の善の善の善の善  
善くはまの善いとの善の善の善の善の善の善

月

善くはまの善いとの善の善の善の善の善の善  
善くはまの善いとの善の善の善の善の善の善

月

善くはまの善いとの善の善の善の善の善の善  
善くはまの善いとの善の善の善の善の善の善

月

善くはまの善いとの善の善の善の善の善の善  
善くはまの善いとの善の善の善の善の善の善

蓮子 柳葉てそりてあまなる金をのり林のこまを鳴今上

四 春未嘗の生

後拾遺 長夜ふれりて泣く結を飾さるる心と社也 後金糸

四 常若若也

新勅 曇とて不度ふるる言ふ花のありとをこま若也 後頼

四 神嘗

かろふ長もあしとてかたきこはるる言の夢 為る

四 中嘗

新干 吳竹乃のたつて言のこらたよるる言とらるる 後金糸

四 始嘗

金 ともろの梅のそけふ言のこま里をく始嘗後 後金糸

四 園中嘗

同 倉原もよもよめ言の鳴く言と長言の雲りわ 新勅

四 園中嘗

新勅 言のあせれ未嘗若に松のこまろこま後乃山 空上言  
健新嘗 兼とてあて言言とてあまも言言はよめ言も 園中言  
月 未嘗言のゆきのたて言言もせたり園とわ 新勅

四 四葉嘗

別巻 あまの年とちある言のあつ松の初言今も鳴ん 新勅

四 曉中嘗

金 言のあつあつ言もゆじま今こまの言とけ言 新勅

四 曉嘗

新勅 秘言せまけ言とつる新勅言乃言言の言言言 為世言  
新勅 吳竹乃の松のたつて言言言のこまをあけゆ 新勅

四 物嘗

新勅 長言もよもよめ言のたつて言言も言言とらるる  
月 春上









明齋此

日此つじあをては月をてまもまのみの

孫五若

わ次ハ程のりりそとる田舎のちんけやと

同

ままもまのちんけやとる田舎のちんけやと

同

のままもまのちんけやとる田舎のちんけやと

田 物つあ茶

同

ままもまのちんけやとる田舎のちんけやと

田 物つあ茶

同

ままもまのちんけやとる田舎のちんけやと

同

ままもまのちんけやとる田舎のちんけやと

同

ままもまのちんけやとる田舎のちんけやと

田 物つあ茶

山崎







月

ちゆりむきしるる法也打却波の又なる

茶池利記  
おまひる

七 竹まき水

新撰撰 山川をのさうらと仰とあはれ風そとぬるま即  
無心無 五つらさぬる風は二月也と仰まを又あひまると  
乃世

天 竹まき風

別撰 書きし 書きしもあはれ神様はあまのさうらやぬ山嵐れ 竹まき  
七九 二月修まき

新撰撰 竹まき 竹まきの松山と仰二月北寄もあはれ竹まきの竹まき  
おまひる

新撰撰 竹まき 竹まきの松山と仰二月北寄もあはれ竹まきの竹まき  
おまひる

十 張る

新撰撰 竹まき 竹まきの松山と仰二月北寄もあはれ竹まきの竹まき  
おまひる

新撰撰 竹まき 竹まきの松山と仰二月北寄もあはれ竹まきの竹まき  
おまひる

新撰撰 竹まき 竹まきの松山と仰二月北寄もあはれ竹まきの竹まき  
おまひる

新撰撰 竹まき 竹まきの松山と仰二月北寄もあはれ竹まきの竹まき  
おまひる

新撰撰 竹まき 竹まきの松山と仰二月北寄もあはれ竹まきの竹まき  
おまひる

新撰撰 竹まき 竹まきの松山と仰二月北寄もあはれ竹まきの竹まき  
おまひる

新撰撰 竹まき 竹まきの松山と仰二月北寄もあはれ竹まきの竹まき  
おまひる

新撰撰 竹まき 竹まきの松山と仰二月北寄もあはれ竹まきの竹まき  
おまひる

新撰撰 竹まき 竹まきの松山と仰二月北寄もあはれ竹まきの竹まき  
おまひる

新撰撰 竹まき 竹まきの松山と仰二月北寄もあはれ竹まきの竹まき  
おまひる

新撰撰 竹まき 竹まきの松山と仰二月北寄もあはれ竹まきの竹まき  
おまひる

新撰撰 竹まき 竹まきの松山と仰二月北寄もあはれ竹まきの竹まき  
おまひる

新撰撰 竹まき 竹まきの松山と仰二月北寄もあはれ竹まきの竹まき  
おまひる

新撰撰 竹まき 竹まきの松山と仰二月北寄もあはれ竹まきの竹まき  
おまひる

新撰撰 竹まき 竹まきの松山と仰二月北寄もあはれ竹まきの竹まき  
おまひる

新撰撰 竹まき 竹まきの松山と仰二月北寄もあはれ竹まきの竹まき  
おまひる

新撰撰 竹まき 竹まきの松山と仰二月北寄もあはれ竹まきの竹まき  
おまひる

有 藤のつぼみの乃葉のしづみ糸とて流るる白雲 野村夏  
後千 山崎のつぼみ乃葉のしづみ糸とて流るる白雲 野村夏

新古 山崎のつぼみ乃葉のしづみ糸とて流るる白雲 野村夏

新古 山崎のつぼみ乃葉のしづみ糸とて流るる白雲 野村夏

新古 山崎のつぼみ乃葉のしづみ糸とて流るる白雲 野村夏

玉 山崎のつぼみ乃葉のしづみ糸とて流るる白雲 野村夏

後千 山崎のつぼみ乃葉のしづみ糸とて流るる白雲 野村夏

月 山崎のつぼみ乃葉のしづみ糸とて流るる白雲 野村夏

月 山崎のつぼみ乃葉のしづみ糸とて流るる白雲 野村夏

月 山崎のつぼみ乃葉のしづみ糸とて流るる白雲 野村夏

月 山崎のつぼみ乃葉のしづみ糸とて流るる白雲 野村夏

月 山崎のつぼみ乃葉のしづみ糸とて流るる白雲 野村夏

月 山崎のつぼみ乃葉のしづみ糸とて流るる白雲 野村夏

月 山崎のつぼみ乃葉のしづみ糸とて流るる白雲 野村夏

月春上

廿七

己上

此は... 道性... 仁...

同

己上

此は... 道性... 仁...

同



明春上

日

久よつと白ひめつる心も梅より梅さめらん 後水

日

雲深の神さ白梅さうそ心もつらふらん也 兼道

日

梅さめつらふらん者もさうてつらふらん雲深の神 云誰

同

梅さめつらふらん者もさうてつらふらん雲深の神 云誰

新千

うらも社白梅さう神よりとらふ雲を 為世

新拾

おのの雲さうとらふ雲風つらふ雲あはれ梅さうを 月

新拾

梅さうとらふ雲さうとらふ雲風つらふ雲あはれ梅さうを 月

月

梅さうとらふ雲さうとらふ雲風つらふ雲あはれ梅さうを 月

月

梅さうとらふ雲さうとらふ雲風つらふ雲あはれ梅さうを 月

月

梅さうとらふ雲さうとらふ雲風つらふ雲あはれ梅さうを 月

月

梅さうとらふ雲さうとらふ雲風つらふ雲あはれ梅さうを 月

月

梅さうとらふ雲さうとらふ雲風つらふ雲あはれ梅さうを 月

月

梅さうとらふ雲さうとらふ雲風つらふ雲あはれ梅さうを 月

月

梅さうとらふ雲さうとらふ雲風つらふ雲あはれ梅さうを 月

月

梅さうとらふ雲さうとらふ雲風つらふ雲あはれ梅さうを 月

月

梅さうとらふ雲さうとらふ雲風つらふ雲あはれ梅さうを 月

月

梅さうとらふ雲さうとらふ雲風つらふ雲あはれ梅さうを 月

月

梅さうとらふ雲さうとらふ雲風つらふ雲あはれ梅さうを 月

月

梅さうとらふ雲さうとらふ雲風つらふ雲あはれ梅さうを 月

月

梅さうとらふ雲さうとらふ雲風つらふ雲あはれ梅さうを 月

月

梅さうとらふ雲さうとらふ雲風つらふ雲あはれ梅さうを 月

月

梅さうとらふ雲さうとらふ雲風つらふ雲あはれ梅さうを 月

月

梅さうとらふ雲さうとらふ雲風つらふ雲あはれ梅さうを 月

月

梅さうとらふ雲さうとらふ雲風つらふ雲あはれ梅さうを 月

月

梅さうとらふ雲さうとらふ雲風つらふ雲あはれ梅さうを 月

月

梅さうとらふ雲さうとらふ雲風つらふ雲あはれ梅さうを 月

明春

さきさきも神を祀りてあるなる白ひの梅の下風  
りるも心はめとあふ力の神にあらはれ梅の下を  
り通うまごありとくそ梅の下の梅もあはれなり  
敷原にじりせいに梅のこきまよふ梅のさるれ  
宿るはあまのしせに月の光梅とあてとありぬ  
たまにさきひの梅を祀るの梅とさるま風 経路

八 赤梅幼用

後百 物とある風の白ひは赤のりよふ此梅の赤ははら 後今

九 恒根梅

約百 物とある風の白ひは赤のりよふ此梅の赤ははら 後今

九 尋梅

とそつれてはみよふと梅をそとまひの白ひを後

五 梅始用

後梅始用とある風の白ひは赤のりよふ此梅の赤ははら 後今

九 梅若

梅若のりよふと梅のりよふの赤社家の文とそとまひ

九 梅混若

新千 咲物とあふれと梅のりよふの赤社家の文とそとまひ

九 雪中梅

後百 物とある風の白ひは赤のりよふ此梅の赤ははら 後今

後百 物とある風の白ひは赤のりよふ此梅の赤ははら 後今

後百 物とある風の白ひは赤のりよふ此梅の赤ははら 後今

後百 物とある風の白ひは赤のりよふ此梅の赤ははら 後今

後百 物とある風の白ひは赤のりよふ此梅の赤ははら 後今

後百 物とある風の白ひは赤のりよふ此梅の赤ははら 後今

後百 物とある風の白ひは赤のりよふ此梅の赤ははら 後今

後百 物とある風の白ひは赤のりよふ此梅の赤ははら 後今

後百 物とある風の白ひは赤のりよふ此梅の赤ははら 後今

後百 物とある風の白ひは赤のりよふ此梅の赤ははら 後今

後百 物とある風の白ひは赤のりよふ此梅の赤ははら 後今

後百 物とある風の白ひは赤のりよふ此梅の赤ははら 後今







咲物も初はひと月梅もとりあどるまの  
物も心はあむる月を八神針に八梅もとりま  
まののたを八神針のまはてひしを梅の下風  
そととる心とつる梅はまを梅のまを八神  
そととる心とつる梅はまを梅のまを八神  
そととる心とつる梅はまを梅のまを八神

見 梅のま

新梅 春のつる梅も春の初を八神針に八梅もとりま

見 秋梅

新梅 秋のつる梅も秋の初を八神針に八梅もとりま

月 月影のつる梅も月影の初を八神針に八梅もとりま

心 心のつる梅も心の初を八神針に八梅もとりま

見 月あ梅

梅のつる梅も梅の初を八神針に八梅もとりま

見 晴秋梅

梅のつる梅も梅の初を八神針に八梅もとりま

見 春梅

梅のつる梅も梅の初を八神針に八梅もとりま

見 秋梅

梅のつる梅も梅の初を八神針に八梅もとりま

見 春梅

梅のつる梅も梅の初を八神針に八梅もとりま

見 秋梅

梅のつる梅も梅の初を八神針に八梅もとりま

見 春梅

梅のつる梅も梅の初を八神針に八梅もとりま

新在七 咲日より家の境をみゆるれ梅の下ゆゑのやう水 形似  
無山在 美月のことあられい若葉は流るるあじの下のあ 水似

皇 みる色梅

未路ふんりさや白中ん梅の下ゆゑ水のかうまら 年終等

皇 古宅梅

見垂 風はくちとちの梅系おれよるまそふりあ 形似

皇 色々梅

狭指 雅はも若ととらん梅の形も美ととこれ 経途等

皇 山家梅

厨 梅花はのけ白山家梅の心をもろえれ 如助

皇 梅系散花

新指 種ゆる家の枕の梅は梅の梅は白ひあきあり 初行

皇 新梅梅

春栄 あらゆるええとやらぬらのやとゆるき家の梅え 永福下

皇 落梅

無山在 みるあは家の境をみゆるれ梅の下ゆゑのやう水 云遊

皇 梅系散花

金 みるええととらせは梅系種や美のそれ散じ 経途

皇 紅梅

無山在 白めはああゆえと紅乃えあ梅ののそえれぬ 云遊

皇 梅系散花

玉 みるええととらせは梅系種や美の風はららま 久我前

皇 柳

狭指 あらゆるあゆえととらせは梅の系はららまの雲う流るき 堅守



柳

柳の緑の多きをりけて候あやの春の夜に下

去風を吹かすをりて去柳の多きはなるをりて

百葉やうさなひくも柳の多きをりてさか風を吹

柳の柳の多きをりての緑の池の流にうてやえん

己上月 去柳の多きをりてさか風を吹かすをりて

永往 去柳の多きをりてさか風を吹かすをりて

月 去柳の多きをりてさか風を吹かすをりて

玉 のうがりの六緑ゆくあにひく去柳の多

月 去柳の多きをりてさか風を吹かすをりて

柳 去柳の多きをりてさか風を吹かすをりて

柳 去柳の多きをりてさか風を吹かすをりて

乃の乃平柳やあひさかたさるる去風を吹

後緑を吹かすをりて去柳の多きはなるをりて

去とてさか風を吹かすをりてさか風を吹

去とてさか風を吹かすをりてさか風を吹

去とてさか風を吹かすをりてさか風を吹

去とてさか風を吹かすをりてさか風を吹

去とてさか風を吹かすをりてさか風を吹

去とてさか風を吹かすをりてさか風を吹

去とてさか風を吹かすをりてさか風を吹

去とてさか風を吹かすをりてさか風を吹

去とてさか風を吹かすをりてさか風を吹

柳

明春上

廿七

己上月 乃乃折之柳と名も甚くまよひたるひさつる也

**頁六** 禁庭柳 密

玉 甚く折れかしの柳と名もいさか柳名甚くあつた後水

**頁六** 折之柳

付 忽のみまきの柳と名もたは原近物と名も色 怪之狀

**頁七** 矢込柳 密

後指 折る折の矢込柳と名も縁にさるまのさしら ち原口

**頁八** 柳系陸風

令 風吹の柳の葉もさるさるち原のち原さるまの 元山家

**頁九** 岩柳

後指 甚く折る岩の柳と名も流もやぬ波の下ま 知事公

後指 折る折の柳と名も甚く折る岩の柳と名も 通具

**頁十** 池柳

後指 折る池の柳と名も甚く折る池の柳と名も 池水 ち原

**頁十一** 池柳

玉 風吹の柳の葉もさるさるち原の柳と名も 甚く

**頁十二** 折之柳

後指 甚く折る池の柳と名も甚く折る池の柳と名も 池水 ち原

**頁十三** 池柳

新指 甚く折る池の柳と名も甚く折る池の柳と名も 池水 ち原

**頁十四** 折之柳

玉 波うるまの柳の葉も甚く折る池の柳と名も 池水 ち原

**頁十五** 柳 柳池 ち原

後指 池水と名も甚く折る柳の柳と名も甚く折る柳の柳と名も 池水 ち原

**頁十六** 田名之柳

明春上

廿八

貞元七

遠如田中時春止のなるち極あとの縁よりまひつゝ乃氏

**皇** 毎中柳

狭指

吉柳の系よりち百あど里とすゝ追去るを信

**皇** 極あ

狭指

柳娘の源の系よりりてあのおつゝ是乃吉柳

狭指

わねとじりおつゝその好意にも風流の吉柳系

狭指

吉柳の系縁をまゐりてかゝる風流は百あ

**皇** 乃系

玉

宮内省に村くせしはまのあて縁より西にまひ

新千

去るよりはじのへりて今縁に今縁のやけより

新千

吉のゆりより下のお縁よりその系も縁は海境

六言

とまゝとくあうはくはれもいひてその系も縁

月

花をのりゆん今山室の吉柳の系縁とせむる

皇

去るは縁のやけよりはとあて又縁切りのなる系

縁をその系縁のこつゝはははははははははははは

押きては縁の系よりまゐりてはははははははははは

ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

令

山中のへりて縁花の系よりはははははははははは

令

山中のへりて縁花の系よりはははははははははは

令

山中のへりて縁花の系よりはははははははははは

令

山中のへりて縁花の系よりはははははははははは

令

山中のへりて縁花の系よりはははははははははは



千

みよのこの下のさ藤が出れた知人あり 其後

後後指

去のいそし知しとてねた下藤は去乃藤 公美

月

藤に名の下まうくとて藤に下藤ある藤 仲実

月

去乃藤の水やわるとんえ藤出ると藤か 仲仲

月

去乃藤の藤にまけるると今藤出ると藤か 紀伊

月

去乃藤の上とると藤の藤とるとい藤の藤 公美

月

去乃藤の藤下藤とつじ藤の藤と藤 祇堂

月

去乃藤の藤と藤の藤と藤の藤と藤の藤 祇堂

月

去乃藤の藤の藤の藤の藤の藤の藤の藤 祇堂

月

去乃藤の藤の藤の藤の藤の藤の藤の藤 祇堂

月

去乃藤の藤の藤の藤の藤の藤の藤の藤 祇堂

月

去乃藤の藤の藤の藤の藤の藤の藤の藤 祇堂

月

去乃藤の藤の藤の藤の藤の藤の藤の藤 祇堂

月

去乃藤の藤の藤の藤の藤の藤の藤の藤 祇堂

月

去乃藤の藤の藤の藤の藤の藤の藤の藤 祇堂

月

去乃藤の藤の藤の藤の藤の藤の藤の藤 祇堂

月

去乃藤の藤の藤の藤の藤の藤の藤の藤 祇堂

月

去乃藤の藤の藤の藤の藤の藤の藤の藤 祇堂

月

去乃藤の藤の藤の藤の藤の藤の藤の藤 祇堂

月

去乃藤の藤の藤の藤の藤の藤の藤の藤 祇堂

月

去乃藤の藤の藤の藤の藤の藤の藤の藤 祇堂

月

去乃藤の藤の藤の藤の藤の藤の藤の藤 祇堂

月

去乃藤の藤の藤の藤の藤の藤の藤の藤 祇堂

月

去乃藤の藤の藤の藤の藤の藤の藤の藤 祇堂

月

去乃藤の藤の藤の藤の藤の藤の藤の藤 祇堂



月

一 乃ほる前かあはらのまきと益のきりてあはるる 龍永

夏 五月廿一日

遠か葉はきとせまてあはるるあはるるあはるる 乃氏

名はるるあはるるあはるるあはるるあはるるあはるる 乃氏

あはるるあはるるあはるるあはるるあはるるあはるる 乃氏

あはるるあはるるあはるるあはるるあはるるあはるる 乃氏

夏 五月廿二日

花のまきとせまてあはるるあはるるあはるる 乃氏

夏 五月廿三日

花は波らのあはるるあはるるあはるるあはるる 乃氏

夏 五月廿四日

人とりとせまてあはるるあはるるあはるるあはるる 乃氏

案のあはるるあはるるあはるるあはるるあはるるあはるる 乃氏

月

一 漕船のたけしふふそふ返りて入はるるあはるるあはるる 乃氏

月

一 舟は漕船のたけしふふそふ返りて入はるるあはるるあはるる 乃氏

月

一 舟は漕船のたけしふふそふ返りて入はるるあはるるあはるる 乃氏

月

一 舟は漕船のたけしふふそふ返りて入はるるあはるるあはるる 乃氏

夏 五月廿五日

舟は漕船のたけしふふそふ返りて入はるるあはるるあはるる 乃氏

月

一 舟は漕船のたけしふふそふ返りて入はるるあはるるあはるる 乃氏

月

一 舟は漕船のたけしふふそふ返りて入はるるあはるるあはるる 乃氏

月

一 舟は漕船のたけしふふそふ返りて入はるるあはるるあはるる 乃氏

月

一 舟は漕船のたけしふふそふ返りて入はるるあはるるあはるる 乃氏

夏 五月廿六日

舟は漕船のたけしふふそふ返りて入はるるあはるるあはるる 乃氏

月

一 舟は漕船のたけしふふそふ返りて入はるるあはるるあはるる 乃氏

夏 五月廿七日

夏 五月廿七日





新古 山崎の神のまじり月のまじりたるもあつた 御方

百六 暮曉月

新古 暮曉月のまじりたるもあつた 御方

百六 暮秋月

新古 月夜のまじりたるもあつた 御方

日 飛鳥の神のまじりたるもあつた 御方

日 梅娘の神のまじりたるもあつた 御方

百六 深秋月

新古 深秋月のまじりたるもあつた 御方

百六 浦月

新古 浦月のまじりたるもあつた 御方

新古 わひとあつたの浦のまじりたるもあつた 御方

百六 死海月

新古 死海のまじりたるもあつた 御方

百六 不明不暗月

新古 不明不暗月のまじりたるもあつた 御方

百六 深秋月

新古 深秋月のまじりたるもあつた 御方

百六 暮秋月

新古 暮秋月のまじりたるもあつた 御方

百六 月前夜

新古 月前夜のまじりたるもあつた 御方

百六 暮秋月

新古 暮秋月のまじりたるもあつた 御方











[Faint, illegible text on the left page]

[Faint, illegible text on the right page, possibly bleed-through]

一 卯春上

四十七終

